

学校改革に挑む実践事例

生徒の資質・能力をどう育てていくか。そのために学校としてどのように取り組んでいるのでしょうか。それぞれの学校の置かれた現状から、先生方の奮闘、今見えてきた成果まで、4つの事例をレポートします。

学級減の危機を機に どの生徒も自己肯定感をもてる学校へ 校内外で連携し支援体制を整備

CASE ① 前沢高校 (岩手・県立)

**枠組み維持のためだけでなく
生徒のための改革に着手**

岩手県南部にある県立前沢高校。どんな学校か、ひとりで表すのは難しい。この10年足らずの間にも、さまざまに変化してきたからだ。

かつて授業の成立すら困難だった状況から、キャリア教育の充実と地道な生徒指導により、数年かけて落ち着いた学校となった。一方で生徒数は減少が続き、2015年度から学年2学級規模に縮小。さらにはその年の12月、岩手県教育委員会は「新たな県立高等学校再編計画」を発表し、19年度から同校の学級数を1クラスとする方針が示された。これが、新たな変化を起すきっかけとなった。

同校は16年度から、学校の規模縮小への対応と、新たな学校の魅力の創造を目指す「前沢高校活性化プロジェクト」をスタート。これは単なる生徒集めが目的ではないと、昨年度校長・里館文彦先生は語る。

「本校の学校改革は、学校の枠組みの維持だけでなく、生徒たちがこの学校でよかったと言って卒業できる学校であるためです。その共通認識の下、先生方一人ひとりが動いています」

**幅広い視点から現状把握し
授業改善や広報強化へ**

活性化に向けてまず取り組んだの

は、現状とニーズの把握だ。生徒、保護者、教職員、同窓生にアンケートを取り、「前沢高校に対するイメージ」「どのような学校であるべきか」「必要な取り組みについてのアイデア」などについて意見を収集。また、近隣の中学校23校を訪問し、直接、同校に対する意見や要望の聞き取りを行った。さらには、教職員は教員研修会、生徒は特別授業にて、学校活性化をテーマとしたワークショップを実施し、それぞれができることについて意見を出し合った。

半年間にわたるこうした取り組みから見えてきたのは、生徒同士および生徒と教師の距離が近いという小規模ならではの特長や、学校の良さが周囲には見えにくいという課題、そして授業に対する期待の高さなどだ。それが、アクティブ・ラーニングの導入をはじめとする授業改善、あるいは中学校訪問やSNSを活用した積極的な広報戦略の重点化につながった。また、教育活動の成果を検証し修正を繰り返す、カリキュラム・マネジメントの必要性が確認された。

**学校全体で地域ボランティア
誰かの役に立つ経験をする**

「選ばれる学校」となるためには、通学圏内にあるほかの普通科高校にはない独自性も必要だ。そこで、今いる生徒たちをいかに輝かせるかという観点から、「どの生徒も安心して学び成長

できる学校」という特色を打ち出した。副校長・千葉貢先生はこう語る。

「本校には、成功体験があまりなく自信をもちにくい生徒が多数います。また、不登校経験者や、学習面・コミュニケーション面で支援が必要な生徒も少なくありません。そういう子どもも含め、どんな生徒も受け入れ、安心して3年間が送れる学校でありたいと考えました」

そのための具体策の一つは、学校ぐるみで行うボランティア活動だ。その発端となったのは、16年12月、同校生徒27人が参加した近隣の支援学校のクリスマスコンサート。支援学校の子どもたちに喜ばれ、「帰らないで」と追いつがれつつ帰ってきた同校生徒の表情が、これまでになく生き生きしていたという。

「この世で最大の不幸は誰にも必要とされないと感じる」というマザー・テレサの言葉がありますが、人の役に立つて必要とされるということが、これも自己肯定感を高めるのだということを実感しました(千葉副校長)

17年度、2学年全体でLHRの時間を活用し、地域ボランティアを核としたプログラムに取り組んだ(図1)。生徒は二手に分かれ、2日間にわたって障がい者と共に働く体験や、小学生の見守り体験を実施。そこで得た実感を基に、地域の福祉において自分たちができることについて話し合った。

[学校データ]

1925年創立/普通科/生徒数137人(男子72人・女子65人)/進路状況(2018年3月実績)
大学5人・短大2人・専門学校12人・その他進学3人・就職20人

取材・文/藤崎雅子

前沢高校の近年の動向

2015年
12月

岩手県教育委員会が「新たな県立高等学校再編計画」を発表
(前沢高校の学級数を2019年度から1学級とする方針)

「前沢高校活性化プロジェクト」スタート

リサーチ・協議 ⇒ 目指す学校像、具体策の明確化

- 関係者へのアンケート調査(生徒、保護者、職員、同窓生)
- 高校受験産業への聞き取り調査
- 周辺中学校23校への学校訪問
- 職員ワークショップ実施
- 生徒ワークショップ実施

2016
年度

授業・活動

- アクティブ・ラーニング型授業の推進
- アクティブ・ラーニング研修会および中高情報交換会の開催(2回)

多様な生徒への対応

- 生徒の気になる言動について文書にて共有
- SSTをテーマに教員研修会を開催(2回)

広報

- 年2回の中学校訪問
- 学校webサイト更新頻度について検討

- 1・2学年でSST定期実施



2017
年度

- 地域ボランティアを核とした探究学習を実施(図1参照)



「学校おこし」をテーマとした教職員研修会。県内の高校の活性化事例を学び、自校の今後について議論を交わした。



生徒も「より良い前沢高校を作っていくために、私たち一人ひとりにできることは何か」についてワークショップを開催。

多様な個性を尊重し 人間関係を築くことを学ぶ

このほかにも、地域での清掃やイベントのサポートなど、学校ぐるみで日常的に校外に出てボランティア活動を実施している。

もう一つの具体策が、コミュニケーション教育の充実だ。17年度は1・2学年を対象に、岩手県立大学より講師を招いてSST(ソーシャル・スキル・トレーニング)の授業を4回実施。怒りへの向き合い方や、自分の気分への寄り添い方

などについて、グループワークを交えて学習した。

「支援が必要な生徒のみではなく全員で取り組むことにより、コミュニケーションの全体的な底上げを狙った取り組みです。どんな個性であっても排除せず認め合い、相手の立場を思いやりながら人間関係を構築していけるようになってほしいと考えています」(教育相談・特別支援コーディネーター・渡部忍先生)

地域ボランティアやインターンシップなど実社会における学びとの相乗効

生徒一人ひとりを 面で支える体制を整備

ボランティア活動やSSTなどの具体策が効果を発揮している背景には、生徒を面で支える組織力が垣間見える。どの生徒も安心して学び成長できる学校づくりは、各教員の個人の力に頼るのではなく、さまざまな連携によって推進されてきたのだ。

同校ではかねてより週1回「支援会議」を開催し、個別の生徒に関する気になる情報を全学年で共有している。また、16年度からは学年の取り組みとして、問題発生あるいはその兆しがみられた際、随時、文書での共有も始まった。共有文書には各教員の分析コメントが追記されることもあり、2学年長・板澤毅尚先生はそこから学ぶことが多いという。

「ほかの先生方の生徒の見取り方にふれ、生徒と向き合うとき、単に時間を共有するだけでなく、生徒をどう観察するかという視点が大切であることに気づかされました」(板澤先生)

多くの教員が生徒一人ひとりの状況を把握することが、保健室利用者の減少にもつながっているようだ。

「生徒は悩みや困ったことができたとき、保健室に駆け込むだけでなく、さまざまな先生方に相談するようにな



教務主任
川原恵理子先生

進路指導主事
立花志津先生

副校長
千葉 貢先生

校長(取材時)
里館文彦先生

養護教諭
く 久多良知花先生

教育相談・特別支援
コーディネーター
渡部 忍先生

2学年長
板澤毅尚先生

図1 「地域の福祉を学ぶ」地域ボランティアのプログラム

日程	内容
8月23日	グループワーク「福祉概論 福祉を知ろう」 ～地域を支える「ボランティア力」への期待～ 講師：秋田看護福祉大学准教授 吉田守美氏
8月23・24日	グループ別ボランティア活動 ①共に生きる体験…障がい者就労支援施設にて心身の障がいのある人と共に働く。また、児童福祉施設にて子どもとのふれあいを通して「共生できるまち」の在り方を考える ②見守り体験…児童館、放課後子ども教室にて子どもたちとのふれあいを通して「子どもの見守り」を体験する
9月26日	探究学習「地域の福祉を学ぶ(まちおこし)」 ボランティア活動の振り返り学習
10月21日	前高祭(学校祭)にて代表者が学習発表



学校改革に取り組んできた教員たちに話を聞いた。

「一人ひとりに寄り添って、生徒が自分らしく生きていく道を探すサポートができることにやりがいを感じます」(渡部先生)

「授業にアクティブ・ラーニングの視点を取り入れてみて、座学だけではわからない生徒の多様な面に目が向き、生徒の成長が見られるようになりました」(教務主任・川原恵理子先生)

「生徒たちが小さな成功体験を積み重ね、自分に自信をもって卒業していくことが喜びです」(進路指導主事・立花志津先生)

「養護教諭・久多良知花先生」

生徒を面で支えるため、校内のみならず、異校種間の連携も進めてきた。17年度は近隣の中学校を招いた地域連携教育相談会議を2回実施。特別支援学校や岩手県自閉症協会、奥州市健康福祉部との意見交換も交え、共に生徒の支援方法について考える機会をもった。多様な生徒を受け入れるにあたって、今後も小・中学校と定期的な情報交換会議を開催し、長期的な視点にたって生徒を理解し、日々の指導に生かしていく予定だ。

「危機感より改善イメージをもち「みんなでやってみよう」

「最初からうまくいかないかもしれないけれど、まずやってみよう。そう覚悟できるようになったのは、自分自身の大きな変化です。それも、自分ひとりでやると失敗しがちですが、ほかの先生方の力も借りてみんなでやったほうがうまくいくことも学びました」(板澤先生)

**特色への理解が進み
志願者数は前年比1.5倍に**

2年間で、同校に対する周囲の評価は確実に変わった。中学校への聞き取りでは、「安心して生徒を送れる」「連携をお願いしたい」など、同校を頼りにする声が多くあがるように(図2)。中

コメントから感じられるのは、学校規模縮小の危機感より、生徒の成長を支援したいという思い。その手応えが改革を加速させてきたとわかる。

「危機感を煽るのではなく、こうすると生徒も学校も良くなっていくというイメージを共有しながら取り組んできました。実際に生徒が変わり始めると、先生も自信をもって進むことができるようになったのではないだろうか」(千葉副校長)

同校教員に「常に生徒のためを考えているプロ集団」と信頼を寄せる里館校長は、「小さな失敗を恐れず存分に挑戦してほしい」と呼びかけてきた。そんな組織風土で、教員は自身の成長も感じている。

図2 中学校からの聞き取り結果より(2017年度)

- 生徒を送り出す側としては、一人ひとりを大切にしてくれる姿勢はありがたい。
- 発達障がいをもつ生徒が増加している。そういった生徒に対する指導体制をもっているということで、今後参考にさせてほしい。
- 多様な生徒がいて、指導に苦慮している。前沢高校は貴重な学校だと思っている。
- 昨年度はいろいろとご配慮いただき感謝している。また、入学した生徒に対しても手厚く指導していただきありがたく思っている。
- 中学校のうちにもっと育てて高校生に送れるように、今後ますますの連携をお願いしたい。
- 前沢高校なら、安心して生徒を送れると感じた。もっと周知していきたい。

学生からの授業見学や学校体験の申し込みは増加し、18年度生徒募集では前年比1.5倍の志願者が集まった。学級数維持の可能性への希望はまだ消えていない。

2年間で一定の成果をあげたが、今後も学校改革は続くという。生徒は常に入れ替わり、数年後も今のやり方が通用するとは限らないからだ。

「教育現場の答えはいつも生徒にある。いかに生徒をきちんと的確に見取るることができるか、理解できるかに尽きます。われわれが生徒たちの変化に対応していけるよう、常にエビデンスに基づいて現状把握しながら改善していきたいと考えています」(千葉副校長)